

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
未来を拓く北っ子～共に学び、共に生きる児童の育成	① 自立に向かう規範意識と社会性の育成 ② 学びに向かう力の育成と学び合う学習集団の形成

達成 A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
① 自律的な規範意識と社会性の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○落ち着いた生活環境・学習環境づくり	校内ルールやマナーの徹底	・生徒指導の合言葉を守って生活する児童の割合を85%以上にする。 ・進んであいさつができていてと答える保護者等の割合を85%以上とする。	・昨年度作成した児童に親しみやすい合言葉を継続して用い、生活朝会やクラス掲示等、機会を捉えて説明・指導し、落ち着いた学校生活が送れるようにする。 ・ルールやマナーを明文化して職員で共通理解を図り、統一した指導を行う。	B	・生徒指導の合い言葉は、昨年度からの継続使用により、その内容がほとんどの児童に浸透している。 ・月1回の生徒指導連絡協議会の実施により、校内の諸課題について、職員の共通理解を図ることができた。 ・進んであいさつができていてと答える保護者の割合は78%にとどまった。今後も継続して指導していく必要	・挨拶に関しての継続的な指導の取組が必要である。また、学校外での挨拶については、保護者や地域の方にも協力を仰いだり、児童の頑張り伝える機会を持ちたい。
		正しい言葉遣い・礼儀の意識付けと実践化	・挨拶や正しい言葉遣いを身に付けさせ、相手を尊重する態度を養う。 ・相手の話や意見をよく聞き、相手を受け入れる態度を養う。	・「オアシス」運動の推進 ・言葉遣いの指導 ・合言葉「みやっきいの実践」 みつめてあいさつ やさしいえがお つよいきずな きらきら星をふやそう いつもびかびか北茂安小	B	・挨拶やほかほか言葉の励行など、職員間で共通理解のもと指導を行ったことで、相手を尊重する態度や行動が増えた。「オアシス」の言葉の指導については、「みやっきい」を合言葉に呼び掛けていることから、浸透は不十分であった。	・「オアシス」週間を計画したり、生徒指導担当者や児童会が放送で呼びかけるなど、「オアシス」を児童により意識できるようにする。
教育活動	●いじめ問題への対応	人権・同和教育、道徳教育等の充実	・自分も友達も、大切な存在であることを自覚させ、互いに認め合い、助け合う態度を育てる。	・日常の観察やアンケートの実施等を通して児童の人間関係に気を配り、トラブルに早急に対応し解決することで、好ましい人間関係づくりを進める。 ・月に1回「共に生きる」を考える日を設けたり、集会活動やたわわり活動を通して児童相互の親睦を深めたりして好ましい人間関係づくりを進める。	C	・児童間でのトラブルに際し、早急に対応して、解決していく体制が整っていた。 ・「共に生きる」を考える日や集会活動などを通して、人権について考える機会が増えたが、児童全員の人権意識を高めるには、不十分であった。	・いじめ問題について定期的に職員研修を行い、高い意識を持って対応にあたる。 ・学期に1回アンケートを実施し、早期発見早期対応に取り組む。 ・月に1回の学年朝会や学期に1回の考える日、集会活動及び、日常的な生活の中で、人権に関わる取り組みを行い、児童の人権意識を高め、いじめの未然防止に努める。
		●心の教育	一人一人が認められる居心地のよい学級づくり	・「なかよしアンケート」で「学校が楽しい」と答える児童の割合を90%以上にする。	・「QUテスト」や「なかよしアンケート」を実施し、個に応じた指導を充実させ、児童理解に努める。 ・ケース会議、生徒指導協議会や教育相談部会を行い、対応策を検討し、組織として対応する。	B	・「なかよしアンケート」で学校が「とても楽しい」と答えた児童は48%、「楽しい」と答えた児童は44%で、合計で「学校が楽しい」と答えた児童は、92%となった。 ・様々な事例に関しては、外部の関連機関とも連携しながら対応を進めることができた。
学校運営	○地域・保護者との連携	学校経営ビジョンと本年度の重点目標の周知	・学校教育目標や本年度の重点目標の保護者への周知率80%以上を目指す。	・各担任への周知を徹底するとともに、児童に機会あるごとに伝え、校内から意識を高める。 ・学校便りや学校ホームページ、学年通信、懇談会等、様々な形で保護者の目にもふれるようにして周知させるとともに、学校経営方針と児童の生活や成長の姿がどう結びついているかといった具体的な姿や活動を紹介して理解、協力につなげる。	C	保護者への周知率については、機会をとらえて保護者の目にもふれるようにしたものの、年間を通して50%に満たなかった。実効性のある手立てとともに、組織的な取組の推進が必要である。また、学校の様々な取組への評価は高く、多くの協力をいただいている。	・職員間で共通理解を徹底し、児童や保護者に機会あるごとに伝えるようにする。 ・学校便りや学年だより、ホームページの活用や懇談会など、周知活動をさらに充実させる。学校経営方針と児童の生活や成長の姿がどう結びつかをより具体的に示す。
		家庭との連携による生活習慣・学習習慣の定着	・生活習慣を確立させる。 ・家庭学習の習慣化、家庭学習の充実を図る。	・生徒指導との連携を図ったり、学校便り等で望ましい生活習慣の形成について協力を呼びかけたりする。 ・「家庭学習の手引き」(佐賀県版・本校版)を活用する。 ・「家庭学習ががんばろう週間」を学期に1回設けて、家庭学習のがんばりを評価し、学習への意欲を高める。	B	・家庭での学習の進め方や取り組み方が保護者や児童に分かるように、これまでの「家庭学習の手引き」を見直し、各家庭に配布することができた。 ・「家庭学習ががんばろう週間」では、中学校と連携して取り組み、休日も自主学習に取り組むことができた児童が多かった。	・家庭学習の習慣化や意識づけには、家庭の協力が必要である。そのために、懇談会や通信で家庭学習の意義や効果を知らせ、家庭や児童への働きかけを行っていく。
② 学びに向かう力の育成と学び合う学習集団の形成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	校内研究の推進と個々の授業力の向上	・国語科算数科において、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行い、児童の思考力・表現力を育てる。 ・各学級で、国語算数各1単元の授業を公開し、報告会をもつ。	・習得させるべき知識・技能を明らかにして指導の焦点化を図る。 ・習得した知識・技能を活用させ、解決の見通しを持たせたり、書く活動や伝え合う活動に取り組ませたりする。 ・学年単位で教材研究や授業作り、指導案作りに取り組む。 ・公開授業について半期ごとに報告会を開き、実践や成果・課題を共有する。	B	・全学級で、国語と算数の授業公開を行い、報告会をもつことができた。 ・書く活動や伝え合う活動を意識した授業づくりができていた。 ・国語科の単元計画作りや教師のモデル作成を充実させることができた。 ・授業後の協議会をもてない場合があり、授業改善につなげることができなかった。	・日々の授業の中での書く活動や伝え合う活動の取り入れ方を学年で協議し、授業を改善していく。 ・国語算数だけでなく、他教科でも、自分の言葉で放言する活動を取り入れる。 ・書く活動や伝え合う活動に十分な時間が確保できるよう時間配分を考えると、活動を支える基礎基本の定着に努める。
教育活動	●学力の向上	学習規律の定着とまなび合う学習集団の育成	・授業の始まり、終わりの挨拶や姿勢(立腰)、話を聞く態度など、学習規律を確立する。 ・主体的に学習に取り組む態度を形成する。	・本校の「学習のきまり」の周知徹底を図り、学習のルールを守らせる指導を徹底して行う。 ・安心して学習に取り組めるようにそれぞれの違いを認め、助け合うクラスの雰囲気を作る。 ・「めあて」「自力解決」「話し合い活動」「まとめ」「振り返り」の共通した授業スタイルで授業作りを行う。	B	・「学習のきまり」の実施状況のふり返りを行った。取組には学級差があり、学校全体で足並みを揃えるには各学級がより意識して取り組む必要がある。 ・校内研究を通して「ステップ1・2・3」を意識した授業スタイルは少しずつ広がってきた。 ・来年度に向けて、学習環境を整え規律ある学校生活を作るために「北茂安小スタンダード」作りに取りか	・「学習のきまり」については、定期的に振り返り活動を行い、改善、徹底を図るようにする。 ・「北茂安小スタンダード」は、共通理解のもとに全校で取り組めるように学習面だけでなく、給食や掃除、学校のきまりなど、学校生活全般に広げて作成する。
		基礎基本の確実な定着と活用力の育成	・CRTの結果で、全国平均との比較を昨年度よりも向上させる。 ・「授業が楽しい」「勉強が分かる」と答える児童の割合を90%以上にする。	・TTや少人数指導を積極的に取り入れ指導の充実を図る。 ・朝の時間を活用して、文章の読み取りと計算の反復練習、音読や視写のスキルの向上を図る。 ・家庭学習の手引きを活用して保護者に啓発を図るとともに、適切な量・質の宿題を出す。 ・既習事項の知識・技能の定着を図るような宿題の出し方を工夫する。	B	・TTや少人数指導、単元に応じて習熟度別の授業も行うことができた。 ・算数タイムの導入やドリルを活用した音読や視写を通してスキル向上につなげることができた。特に算数タイムは、上級生で回数を増やすだけでなく、習熟度別少人数指導をし、複数人に対応する体制を整えたことも、12月学力状況調査のよい結果につながった。 ・学力が二極化している学級における宿題の適切な量だけでなく、家庭学習の仕方(集中してきちんと取り組むことが学力として身につく、分からないことは教えてもらっても調べてもよいなど)について、家庭でも学校と同じ意識をもって取り組んでもらえるようにする方法等を考える必要がある。	・朝の算数タイム・音読・視写を継続し、苦手な内容・定着に時間がかかるだろうと思われる内容については繰り返し復習するように、内容についても検討していきたい。 ・宿題をただすればよいのではなく、やり直して確認するなどして、「できなかったことができるようにするためのやり直しの大切さ」を意識させ、集中してきちんと取り組む姿勢を身につけさせたい。
教育活動	○教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	学力向上を目指したICTの積極的かつ有効な活用	・ICTを利用した授業を受けるのが楽しいと感じる児童の増加と、ICTを利用する教員の授業や教材作成に関する技能の向上を目指す。	・電子黒板・ほうけんくん(デジタルカメラ)・タブレットPC等の効果的な使用法や、教材作成に関する便利なツールや学習支援ソフト・便利なサイトについて、紹介・研修する場を設定する。 ・ICT教育推進リーダーやICT支援員と連携しながら、ICT活用に関する疑問や考えを話し合える雰囲気を作る。	B	・新任者への電子黒板・ほうけんくん等についての操作研修会については、新年度始まってすぐに実施した。また、夏季休業中には、実践交流会のためのプレゼンテーション研修及び町内のICT研修会を行った。 ・タブレットPCの利用については、ICT支援員が授業支援を行ったり、センター講座を兼ねた算数の授業研修を行ったりすることができた。	・電子黒板やタブレットPCの操作研修については、新任者のみの実施十分だといえる。フラッシュ教材など、各学年で作成された教材を共有する必要がある。 ・タブレットPCを活用した授業デザインの仕方やプログラミング教育の実施に向けて、実際の授業にどのように活用していけばよいか研究授業や実践交流会を持つ必要がある。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目(あれば記入)							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	・毎日朝食を食べる児童の割合95%以上を目指す。 ・確実なアレルギー対応を継続する。(目標100%)	・朝食の大切さについては、児童に対しては掲示物や委員会活動、学級活動等で定期的に働きかける。家庭に対しては給食便り等を通して朝食の役割とともに内容の重要性についても啓発する。 ・全職員に食物アレルギー対応児童への周知徹底を図る。	A	・毎日朝食を食べる児童の割合は、全体で95%を超えていたが、学年ごとに見ると6年生は90%を下回っていた。朝食だけでなく、早寝早起きの規則正しい生活習慣の定着を進めていく必要がある。 ・アレルギー対応食の提供は、確実に行うことができた。	・規則正しい生活習慣と朝食の大切さについて、児童への継続的な指導と、給食便り等による保護者への啓発を行う。 ・年度初めに、全職員に食物アレルギー対応について共通理解を図る。毎月、調理員とアレルギー対応について確認し、確実に実施する。
学校運営	○特別支援教育の充実	教員の専門性・意識の向上と個に応じた指導・支援の充実	・発達障害や配慮を要する児童についての理解を深める。 ・個別の支援が必要な児童を把握し、保護者、担任、専門機関と連携をとりながら支援にあたり、現状の改善を図る。	・「通級指導教室」「特別支援学級」について全職員で研修する。専門性の高い外部講師による「発達障害」に関する研修会を持つ。 ・支援が必要な児童についてはケース会議を開く。また、必要に応じて巡回相談などの専門機関につなぐ。	B	・外部講師を招き、「発達障害」に関する研修会を持つことができた。 ・担任より相談のあった児童については、専門家からの助言が必要な場合は巡回相談、専門家派遣につなげた。 ・支援レベルシートを作成し、「配慮が必要な児童」の共通理解に活用した。	・次年度も引き続き、研修会などで得た発達障害に関する情報を通信として定期的に発信し、教職員の発達障害への理解を深める。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	勤務時間の適正化	・時間外勤務の月平均35時間以内を目指す。	・業務効率化の促進 ・金曜日に設定した定時退勤日とは別に、月～木曜日の中で、各自で「家庭の日」を設け、少なくとも週2回は時間外勤務をしないようにする。	A	・全職員の1月末までの時間外勤務月平均の平均は、29.7時間と目標を達成することができた。ただ、個人では35時間を上回る職員が35名中10名となった。10名の内訳は、管理職、教務、5・6年生担任、新規採用職員。今後は業務平準化の取組が必要である。	・衛生委員会において、時間外勤務の個人差を少なくするための具体的な取組について検討、試行し、業務の平準化や効率化を進める。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

・本年度の重点目標①自立に向かう規範意識と社会性の育成の取組については、いじめ問題への対応が十分でなく、反省すべき点が多かった。次年度は、今年度の反省を踏まえ、職員の意識をより高め、アンケート等による早期発見、組織の連携を密にした早期対応、人権教育の取り組みの充実により、いじめ問題の未然防止にしっかりと取り組んでいく。また、落ち着いた生活環境・学習環境づくりでは、生徒指導の合言葉は児童に浸透してきたものの、挨拶が十分にできていないといった課題が残った。今後は、保護者・地域と連携し、児童の意識を高める継続的な指導を行い、進んで挨拶のできる児童を増やしていきたい。また、本年度の教育目標、重点目標の周知が不十分であったことについては、毎回、学校便りにも記載している文言についての周知はできていると考えているが、そこに含まれる考えや願い、具体的な実践内容等について継続して家庭との連携・家庭への啓発に取り組む必要がある。

・本年度の重点目標②学びに向かう力の育成と学び合う集団づくりについては、国語と算数の2本立ての授業実践による校内研究、TTや少人数指導により、児童の学力向上、教師の資質向上を目指してきた。佐賀県学習状況調査の結果から中位群の児童の力が伸びてきたなど一定の成果はあったが、叙述に即して正しく読む力の不足や知識や技能など既習内容が確実に身に付いていないなどの課題もあった。今後は、学習内容の確かな習得と定着をめざした授業改善、学習のきまりや北茂安小スタンダードの継続、今年度効果のあった算数タイムの取り組み、家庭との連携により学力向上を図っていく。

・重点項目に含まれない項目については、毎日朝食を食べる児童の割合の増加と勤務時間の適正化の全体目標を達成することができ、成果があったと考えられる。今年度の取り組みの評価結果から、次年度の本校の重点課題が明確になった。次年度は、更に保護者・地域と連携を図りながら、いじめ問題への対応や学力向上、更に不登校の課題解決など課題となった項目について、より組織的に取り組み、改善、向上を図っていく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目